
ぼくと僕

J Å M

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくと僕

【Nコード】

N6665Q

【作者名】

JÅM

【あらすじ】

一人の少年が居る。

彼は気づけば一人だった。

両親はいたけれど、友達もいたけれど、彼は一人だった。

空虚だった。

時々自分のことが分からなくなる、恐怖。

葛藤する毎日。

そんな少年を、かえる出来事が起こる。

プロローグ（前書き）

初めまして。

初の投稿になります。

文でおかしな部分等あるかと思いますが

読んでくだされば幸いです。

よろしくお願いします。

プロローグ

…プロローグ

自分が分からないんだ。

—どうして？

それも分からない自分が怖いんだ。

—理由も分からずに怖がるなんて、可笑しいね。

自分の中が空虚で、寂しくて、空しいんだ。

—何かをもとめているのかもしれないよ。

何かって、なんだろう。

—さあ。分からないよ。君自身ではないのだから。でも、葛藤して
いるんだね。

葛藤。ずっと、そうなんだ。時々考えるんだ、無性に。

―考えていれば、きっといつか答えは見つかるよ。

見つかるものなのかな。
埋めることができるのかな。

父さん、母さん。

ぼく

..ぼく

ピピピピピ..

6時に設定した目覚ましは鳴り出した。

それと同時に自分も重たい瞼を開ける。

昨夜は熱帯夜だったせいもあって、シャツはぐっしりと濡れていた。

「シャワー、あびなきゃ」

ぼくはゆっくりと起き上がり、ベットと目覚まし時計と机しかない殺風景な部屋をあとにした。

誰も居ない一階へと向かい、生温かいシャワーをあびる。

10分程度ですませて、身支度の準備を始める。

朝ご飯は食パン。

毎日一人でリビングの机に向かって食卓を始める。

それをすませた後は、歯を磨いて急ぎ足で玄関へと向かう。

そしていつも目に入ってくる、父と母、そしてぼくの幼い頃の写真。
青空の広がる海を背景に
少し笑顔で写っていた。

父と母に関しては、人間と科学を取り扱う、優秀な研究家ということしかあまりしらない。

いつからから、父と母は家に帰ってくることがなくなっていた。

一人生活をしていくのに、十分なお金だけが仕送りにきている。

電話一つもよこさない両親。

そんな両親に対して、何も感じていないぼく。

けれど時々、夜、とてつもなく自分の中が空虚になるのを感じる時がある。

苦しくて、冷たい。

よぎるのは写真にうつった父と母の顔。

そんな夜は涙が溢れ出て、泣き疲れて寝る。

とにかく、ぼくは一人だ。

「いってきます。」

そうつぶやいて、誰もいない家をあとにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6665q/>

ぼくと僕

2011年10月8日17時52分発行